

日本語の教科書

現在では市販の日本語教育用と銘打った教科書が多数揃っている。むしろ多種多様にあり、選ぶのに苦労するほどである。まだそういった市販の教科書が無い時代、当時の授業を担当していた講師の方々の苦労を考えると、今は恵まれている時代だとつくづく感じる。

しかし、逆に言えば、市販の教科書がたくさんあるから、それらを精査し、ターゲットとする学習者に効果的に授業を進めるために、どんな教科書を採用するか経験や知識も問われる時代になっているようにも感じる。良い教科書がなければ、自分が行おうとする授業に合うように作ればいいではないかという意見もあるかもしれない。けれども、そのようなことは容易にできるものではない。ただでさえ授業の準備に追われ、時間的にも厳しい状況で話し合いを重ね、独自の教科書を作り出していくことは、とても余裕がなければできない。そういった事情から、市販されている教科書の中から学習者のニーズに一番合っていると思われるものを選び、足りないと思われる部分に関しては補助教材を作成したりして使っている日本語教育機関も多いと思われる。

優れた教科書であると言われている教科書でも、自分が今、授業を行っている学習者のニーズに合っているとは言えないことも起こるだろう。しかし、それはその教科書を作った人のねらいや教育機関の事情などを考慮して作られたものであるから、それを学習者の目的もニーズも違う機関で採用しても不満が出て来るだけである。

小学校や中学校で使われている教科書は、文部科学省検定済教科書であり、学習指導要領に基づき編纂されているものが使われている。一方、日本語教育で使われる教科書は、文部科学省の検定済みの教科書というのではなく、市販の教科書もあれば、教育機関ごとに作られた独自の教科書もある。今日のように、いろいろなものがある時代においては、その教育機関が採択した教科書を使ってどのように授業を展開していくかは、やはり教師の技量にかかっているとも感じる。ある意味、料理人のような気もする。素材を活かし、どのように調理して提供するか、似ている部分があるようにも感じる。一流シェフのような日本語教師になれるものならなりたいたいと思う。

選科時代の教科書

いったい昔はどんな教科書を使っていたのだろうか。そう思って調べてみると、『天理大学選科日本語科十周年誌』(169頁)に当時使われていた教科書に関する記録が載っていた。こういった記録が残されているということは、後進の者にとって本当にありがたい。それによると、昭和43年4月現在で、長沼直兄著『標準日本語読本』巻Ⅰ～巻Ⅴとある。長沼直兄と言えば、日本語教育に携わっている者なら知らない人はいないくらい有名な人物である。簡単に紹介すると、戦前は米国大使館で主任教官としてアメリカ人将校への日本語教育を担当し、戦後は言語文化研究所を立ち上げ、その附属の学校として東京日本語学校(通称長沼スクール)を創立して、生涯を日本語教育に尽力した人である。

ある。この東京日本語学校は、選科が始まった頃に、視察に行っていた学校でもあるようだ。筆者もそこで開かれている夏の研修に行ったり、天理教語学院でコンピュータールームを整備する時に参考にしたいと思い、訪問したことがある。実際に行ってみて、本当に歴史のある素晴らしい学校であると感じた。この教科書の優れているところは、日本の文学作品も取りあげられ、日本事情も盛り込まれ、このシリーズで勉強すれば日本の様々なことを知ることができることだ。昭和40年後半～60年代当時、この教科書が多くの機関でも使われていたのだろうと思う。

別科時代の教科書

筆者が天理大学別科日本語課程に勤め始めた頃の教科書は、国際学友会編『日本語読本』(巻Ⅰ～巻Ⅳ)であった。ここで少し国際学友会について紹介する。国際学友会については東京外国語大学の河路由佳教授の詳しい研究があり、河路由佳『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生



写真 国際学友会の『日本語読本』1～4

一戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開』(港の人、2006年)にまとめられている。

国際学友会は、在日留学生のため1935(昭和10)年に外務省の管轄のもとに設立された機関で、その翌年から日本語教育を行っている。敗戦後一時中断するが、1951年より日本語教育を再開した。『Nihongo no hanashikata』(1953)をはじめ『日本語読本巻一～四』(1954～1955)など、鈴木忍、阪田雪子によって著された一連の日本語教科書は国内外で広く使われ、1962年の「外国人のための日本語教育学会」(現在の日本語教育学会の前身)設立に当たっては中心的役割を果たすなど、戦後の日本語教育に大きな影響力を持った。現在も、北新宿にあって、一貫して日本の高等教育機関へ進学する留学生に対する日本語予備教育を行っているのは周知のとおりである。(河路1997: 74)

国際学友会は、日本語教育史の中で古くから留学生に対する日本語教育を行ってきた機関で、その教科書は現場で培われてきたノウハウや、先人の教師が試行錯誤の上に編纂されたものであると言える。日本語教育の歴史を知る上でも、河路氏の論文は非常に示唆に富んだものであり、国際学友会の存在が日本語教育に対して大きな影響を与えていたことがわかる。

[参考文献]

河路由佳「戦前・戦中の国際学友会における日本語教育事業—留学生のための日本語教育と辞典編纂のための語彙調査—」、『人間と社会』第8号、東京農工大学、1997年、73-122頁。